

福澤研究センター通信

Newsletter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第35号 2021年10月31日 発行

目次

*「中津留別之書」—多言語で読む福沢諭吉

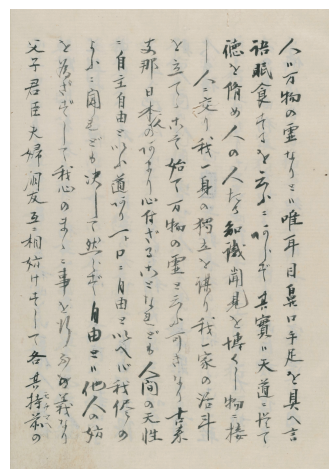
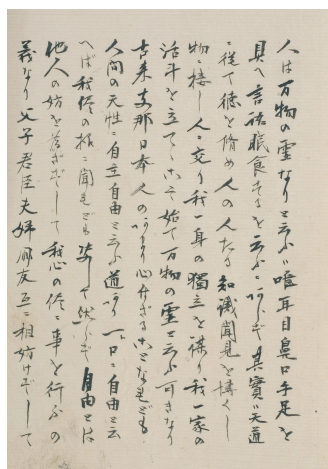
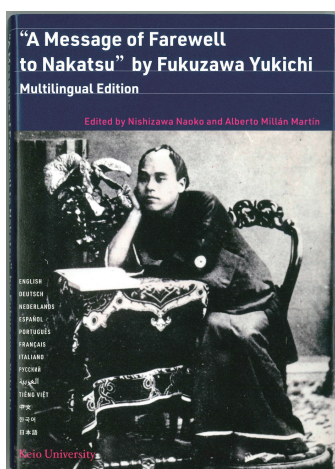
西沢直子、アルベルト・ミヤンマルティン…………… 2	マルコ デル・ベーネ…………… 8・9
ヘレン・ポールハチェット…………… 3・4	マリオン・ソシエ…………… 9
ゲン・ティ・ハイン・トゥック…………… 4・5	*新収資料紹介…………… 10
ハサン・カマル・ハルブ…………… 6	*『小幡篤次郎著作集』刊行事業の進捗状況 …… 10
周曉霞…………… 7	*主な動き／訃報…………… 11
ジョゼ・ミゲル・ピント・ドス・サントス…………… 8	*センター諸記録（2021年1月～2021年9月） …… 12

“A Message of Farewell to Nakatsu” by Fukuzawa Yukichi : Multilingual Edition 「中津留別之書」—多言語で読む福沢諭吉

「中津留別之書」は、明治3年11月27日（西暦1871年1月17日）に、福沢諭吉が青年期を過ごした旧宅で執筆した、ふるさと中津の人びとに向けたエッセイである。半紙7枚に書かれたごく短い文章であるが、明治維新という大きな変革の中で、新しく始まった時代をどう生きるべきかについて、一身の独立や、自主自由、男女の平等、親子の双方性、「官」「民」の役割とその関係を説き、人びとに洋学を学ぶ重要性を述べている。

ぜひ国内外の多くの方に読んでいただきたいと考え、日本語以外を母国語とする近代日本研究者に依頼して12の言語、および私は現代日本語への翻訳を試み、1冊にまとめた。 <https://bit.ly/2YpA16e>

今号では翻訳にあたってくださった方々に、ご寄稿をお願いした。「中津留別之書」からいかなる福沢の想いを読み取ったか、翻訳語選択の悩み、それぞれの国での福沢への評価など、ご一読いただければ幸いです。



「中津留別之書」の福沢諭吉自筆本は2種類残されている。福沢家に残されていたもの（中央）と、中津藩の家老であった桑名豊山に贈られ、のち桑名家から慶應義塾図書館に寄贈されたもの（右）である。異同があり、たとえば冒頭が福沢家本では「と云ふハ」と伝聞の形式になっているのがお分かりになると思う。桑名家本の方がより読み易く推敲されている。

（西沢）

「中津留別之書」の翻訳・解説執筆を終えて

西 沢 直 子

かれこれ10年以上も前に「中津留別之書」を様々な言語に翻訳したいと思いたったものの、遅々として進まず、今回ミヤンマルティンさんという実力も行動力もある優秀な協力者を得て、ついに実現したことはこの上ない喜びである。

なぜ「中津留別之書」なのか？ 慶応2(1866)年11月7日付の福沢英之助宛書簡で、依然「大君之モナルキ」がなくては「文明開化」は進まないと述べていた福沢は、明治を迎えて、どうすれば人びとは封建体制から転換することができるのかを模索し、自身の中で新しい社会のあり方を構築していった。「中津留別之書」はそうして誕生した彼の構想が、初めて体系的に述べられたもので、その思想は彼の生涯を貫くものとなった。

なぜ多言語なのか？ 「中津留別之書」で語られる課題には普遍性があり、どのような社会においても議論が期待できる。また福沢は、間違いなく日本の近代化を担ったひとりであるのに、近年の在外研究は既存の成果に拠っていて停滞気味に感じる。その理由のひとつは、

福沢の著作の翻訳が想像以上に少ないことで、慶應義塾に学んだ留学生ですら、福沢や自校のことをあまり知らない。学校がidentityを強要することには賛成できないが、しかし何を学んだかだけでなく、どこで学んだかから生まれる智の広がりもあると思う。

この多言語翻訳本は、幅広い読者を想定した。そのためまずは読みやすさを考え、翻訳者のみなさんには極力注や解説を加えることを避けていただいた。非常に苦勞をされたと思う。また事前に、言語の概念を議論してすり合わせるといったことはしなかった。日本人の読者であっても、当時の読者ですら、万人が万人同じ意味に解するわけではない。この短いエッセイのなかで、近世社会においては等閑視されていた概念をどう説明したのか、福沢のレトリックをめぐる今後の議論の展開を期して、日英両言語の解説で問題を提起するに止めた。

この本は翻訳者の方々の本当に多大な努力のもとに完成した。深く深く感謝したい。多くの方に手に取っていただくことができれば幸いである。



多言語で読む福沢諭吉： 訳文を読み解いて原文の意味を問い直す

慶應義塾大学経済学部准教授
福沢研究センター所員

Alberto MILLÁN MARTÍN
(アルベルト・ミヤンマルティン)

「一身独立して一国独立する」。福沢諭吉屈指の名言であることは間違いない。出典は『学問のすゝめ』三編(明治6年12月)で、慶應義塾大学出版会から上梓されたDavid A. Dilworthの英語版(2012年)では「national independence through personal independence」と訳されている。訳し方として疑問に思うところは一切ない。ところが、『学問のすゝめ』の土台とされている「中津留別之書」の中には、似たような成句が登場し、頭を抱えるほど訳し方がややこしい。「一身独立して一家独立し、一家独立して一国独立し、一国独立して天下も独立すべし」…これを読んで儒教の経書『大学』に示された「修身齊家治国平天下」という言葉を脳裏に浮かぶ人は少なからう。福沢が、読者に近世社会の事前知識を喚起させながら、明治初期の日本に近代的な西洋文明の思想を導入しようとした試みは、特に「中津留別之書」の文面から明らかである。そのほかにたとえば、「夫婦の別」と「君臣の義」の字義的な意味を替えることで、「五倫」の再解釈を行ないながらそれぞれ男女の対等な関係(一夫一妻)と、国家と国民の相互的な関係を説いている。他言語でも表現を工夫すれば問題なく訳せる。しかし、先の「一身独立…」の成句になると、「国」と「天下」の解釈問題にぶつかる。つまり、「国」が「日本」を指すなら、

「天下(の独立)」とは何か(「世界万国・世の中・社会・政治」か)。他方、「天下(の独立)」が「nation = 日本」を意味するなら、「国」とは何か(「旧国・藩」か)という二者択一だ。今回の多言語翻訳本では、それぞれの訳語選択の判断がほぼ対等に分かれた。

福沢の初期著作は、「思想の換骨奪胎」という特質上、語彙の側面から訳しにくいところが多数ある。学校のテストでたまに問題となる「作者の意図」というものはつきりしないときさえある。しかも、想定読者(研究者? 一般の人?)の設定によって、直訳や意識、精密さかわかりやすさ、訳注の量など、様々な調整が求められる。可能ならば、訳文の読者には原文の読者と同じ解釈の可能性を提供したいものだが、言語の構造上、往々にして意味の選択を余儀なくされる。結局、翻訳には正解なしと言うしかない。どの選択肢にも賛否両論があって、完全に満足できない。本書の解説(英・和文)を書きながら、翻訳は千差万別だからこそ、その差異が原語の真意を考え直す新しい「視野」を与えてくれることに気づいた。

とにかく世界の人びとに福沢諭吉の自由独立、平等社会、学問の必要性に関する考え方を知って、議論してほしい。この願いを可能にしてくれた西沢さん、翻訳者各位に限りなく感謝する。

福沢を翻訳することと「デジタルで読む福沢諭吉」

データベースの検索ツール

慶應義塾大学名誉教授 Helen Ballhatchet
福沢研究センター客員所員 (ヘレン・ボールハチェット)

はじめに

今回「中津留別之書」を翻訳するにあたって、翻訳者間で共有する厳密なガイドラインはなく、ただこのテキストに初めて取り掛かる翻訳者の方に、現代人にとっての読みやすさに重点を置くことをすすめられた。その上でミヤンマルティン氏は、この本に収録された示唆に富んだ解説3の中で、史料を翻訳する人が直面するジレンマ、そこから出てくる選択肢と、各オプションの結果を論じている。

史料の学術的翻訳に際して、原文の筆者および読み手を一方とし、翻訳が対象とする読者をもう一方としたとき、両者間の概念に生ずるギャップを橋渡すことは必要不可欠である。これは例えば文章の書き方や脚注の使用によって実現できる。しかし、「中津留別之書」の場合には、急速な変化が社会的・政治的・経済的な構造と同様に、語彙を含む言語にも影響を及ぼす時代に書かれたがゆえの、特有の難しさがある。要するに、福沢自身が伝達しようとした内容と、彼が想定した読み手である中津藩士族の解釈の間にもギャップがあった可能性が高いと推定できる。もしそうであるなら、翻訳者は、対象とされた読み手が理解したと思われる形で文章を再生産すべきなのであろうか、あるいは、福沢がおそらく伝達しようとしていたことに重きを置くべきなのであろうか。この問題が明白に現れる例として、「国／一国」「天下」の語彙が挙げられる。序盤近くで自由と独立について論じているところの「国／一国」「天下」の場合、福沢が伝統的な士族の考え方を批判しているので 'domain' 'japan' とあえて訳すことにした。すぐ後に続く結婚生活における男女双方の貞節を支持するときの「天下の男子」も 'men of japan' に訳した。一方終盤で福沢が明らかに西洋諸国の代議制や日本が直面する選択について書いているところでは「国／一国」を 'domain' ではなく彼がおそらく意図していた 'nation' という語彙を選択した。またその両方において「天下」は 'japan' と訳すこととした。

「デジタルで読む福沢諭吉」データベース

私の「デジタルで読む福沢諭吉」データベースとの初めての出会いは、「中津留別之書」を含む福沢の女性論に関して、清岡暎一による翻訳を改訂する仕事をしているときのことであった。様々な理由で、このプロジェクトは程なくして改訂というより書き直しと呼べるものへと変わり、「中津留別之書」改訂版ではなく全く新しい翻訳となったが、変更の理由のひとつは、私が「交際」や「世教」、「男尊女卑」といったキーワードやキーフレーズに一貫性を持たせたいと望んだことがあった。「デジタルで読む福沢諭吉」データベースの検索ツールは、特定の著作において、私がこれらの単語の用例を見逃して

いないかを確認するのに便利であった。

しかし、このツールのより有効な使い方は、データベースにある55題(119巻)の書物における福沢自身によるキーワードやキーフレーズの用法を追うことにある。今回私は検索ツールを使い、ミヤンマルティン氏が解説で触れた用語のうち2つについての福沢の用法を調べた。そうすることが、福沢が何を言わんとしていたのかを理解する一助になるのではないかと考えたのである。今までそのようなチェックを行っていないことについて、恥ずかしい思いをしている。

1. 「人は万物の霊なり。」

このフレーズは元々漢文の古典にあり、19世紀の英訳では「人」の部分が 'man' と訳されていた。私は、ミヤンマルティン氏が指摘したように、他の何人かの翻訳者と同様に、男性と同じく女性にも適用できるように 'human beings' や 'people'、'they' を用いた。福沢が想定した読者はおそらく「人」が成人男性のみを指すものと決めてかかったであろうが、福沢が自由と独立の説明から夫妻の関係へと議論を進めたとき、男性と女性は平等であると述べたところ（「男といい女といい、等しく天地間の一人にて軽重の別あるべき理なし」）に私の論拠は置かれている。換言すれば、私は福沢自身が女性も「人」であると見て、読者にもそのように理解することを意図していたと推測したのである。

「デジタルで読む福沢諭吉」データベースの検索ツールによれば、福沢は「万物の霊」なるフレーズを30回（うち1回は重複）使用している。その用例のうち8回は、明らかに女性の地位に関する著作においてである。多くの場合は、福沢の目的は人間が動物に優ると論じることにあるが、特にジェンダーに関わる著作においては、男女の関係は動物的雄雌の単なる身体的な関係よりも高位にあるべきであると主張するために、「万物の霊」なるフレーズを用いている。また『日本婦人論後編』においては、彼が男女平等を強調するときにも、そのフレーズを3回使用している。このことから、「中津留別之書」の序盤におけるこのフレーズを含む文章は、ジェンダー中立的な言葉づかいで翻訳すべきである、と私は論じたい。

2. 「士農工商」

ミヤンマルティン氏は江戸時代の社会の特質に関する近年の認識を引き合いに、この時代において職人・農民・商人間に身分の違いはなく、「士農工商」なるフレーズは、階層的な区分に注意を向けるものというより、一般的に「あらゆる種類の職業」あるいは「あらゆる種類の人びと」を意味するものであったと指摘する最近の見解を紹介している。それに対して異論を唱えるつもりはな

く、実際において江戸時代の社会が「士農工商」のように厳密に区分されていたわけではないというのは確かに射ている。したがってミヤンマルティン氏は「中津留別之書」において「士農工商」という表現は、中津藩士族に「平民の自由を妨げてはならない」と呼びかけるために使われている可能性もあるのではないかと提言している。これは確かにあり得る解釈である。

しかし、中津藩における武家社会内部の階層の違いや（もし『福翁自伝』を額面どおりに受け取るなら）、江戸時代の社会全体の身分の違いに非常に敏感な福沢による他の著作では、このフレーズはいかに用いられているのであろうか。また、このことは「中津留別之書」における彼のこのフレーズの用い方に、どのような示唆を持たせるのであろうか。

「デジタルで読む福沢諭吉」データベースによれば、「士農工商」なるフレーズは10回（うち2回は重複）使われている。例えば『西洋事情』外編2巻では、福沢は階層的でかつ職業に基づく区分であるインドのカースト制を説明するために「士農工商」を使用している。「中津留別之書」の1ヶ月後に刊行された『学問のすゝめ』初編では、彼は実力主義を奨励しようとする明治新政府による生まれながらの身分区分の廃止を歓迎するために用いている（「開闢以来の一美事、士農工商、四民の位を一様にするの基、こゝに定りたりと云うべきなり」）。『文明論之概略』第9章では、彼は四民の身分制、さらにその内部の区分を、江戸時代の日本の社会的停滞と西洋諸国と比べて独立精神の弱さ、その双方の原因としてすら見たのである。「中津留別之書」では、このフレーズは

自由と社会的独立への訴えとの関連の中で使われている。したがって私の見解では、「中津留別之書」におけるこのフレーズはその後の書物で展開される徳川・明治初期の社会に対する厳しい批判の第一歩で、中津藩士族に向けた、藩における階層化された社会内部の存在によって自らを定義するような人間ではなく、自由で独立した個人になるべきであるという意味合いで持ち出されたのではないか。江戸時代と明治初期双方の社会への批判と結び付けられている可能性がある。

おわりに

私は「男子に二女を娶るの権あらば、婦人にも二夫を私するの理なかるべからず。」における「権」の翻訳についても議論しようと思ったが、これはここで扱うにはあまりに複雑すぎる。振り返ってみれば、例えば‘can’のように、あるいは‘are entitled to’とすら訳しても良かったのかもしれない。分かりやすく言い換えることによって、問題を避けることができたのではないかということに気付いたのである……。

私は、以上の検索のきっかけをつくり、福沢の言葉の用法についてさらなる発見に導いてくださった、ミヤンマルティン氏のコメントに非常に感謝している。

最後に、福沢自身が翻訳をすることによってオランダ語と英語の両方を身につけて翻訳者となったことを踏まえれば、150年経ってから自分の思想の中枢をなす「中津留別之書」が12の言語へと翻訳されたことを知れば、彼は非常に喜んだであろう、ということを書いておきたい。



「中津留別之書」一個人的見解

Ho Chi Minh City University of Technology
Lecturer of Japanese Studies and Language
福沢研究センター客員所員

Nguyễn thị Hạnh Thục
(グエン・ティ・ハイン・トゥック)

「中津留別之書」を読みかつ翻訳する際、私を感じるテキストの興味深い点は2つある。

第一は、翻訳元の日本語と翻訳先のベトナム語において、一部の単語に共通する特徴があることである。つまり日越両言語の語彙には、単に発音が似ているのみでなく、同様の語義も持つものが存在する。その共通点は右の照合表のとおり明らかである。

右記の類似点は、ベトナム語も日本語も過去のある時期に漢字文化に強い影響を受けたため、現代ベトナム語の表記がアルファベットでありながら、両言語に占める漢字由来の単語が多いからである。

第二に、「中津留別之書」における天と人間同士の三者関係、及びそれに潜在する能動的な相互作用が見られ

漢字	ベトナム語	ベトナム語の発音	日本語の発音	意味
万物	Vạn vật	ヴァン・ヴァト	ばんぶつ	天地間のすべての物
天性	Thiên tính	ティン・ティン	てんせい	天から授かった性質
天道	Thiên đạo	ティン・ダウ	てんどう	天の道
父子	Phụ tử	フ・トゥ	ふし	父と子
夫婦	Phu phụ	フウ・フ	ふうふ	夫と妻
自主	Tự chủ	トゥチュ	じしゅ	他から干渉や保護を受けず、独立して事を行うこと
自由	Tự do	トゥゾー	じゅう	自分の意志・感情に従って行動すること

ることである。

本文の書き出しにあるように、天と人が双方向に結びつけられているのが特徴である。具体的には、冒頭文「人は万物の霊なり」(“A Message of Farewell to Nakatsu” by Fukuzawa Yukichi : Multilingual Edition 9 頁) から「結局その子をして無智無徳の不幸に陥らしめ、天理人道に背く罪人なり。」(前掲書、11 頁) というところまでに、三つの三者関係が紹介されている。それは、天対人間同士の関係、天対男と女の関係、及び天対親と子の関係である。

まず、天対人間同士の関係は「人は万物の霊なり」「天道に従て」「人間の天性に自主自由という道あり」の三つの表現のなかに表れている。福沢によれば、天は一人ひとりに自主・自由という自然な性質を与える。これに対して、与えられた人間は「天の道」すなわち積極的にその素晴らしい本性を貫いて生きなければならない。つまり、これは天に対する人間の務めるべきことだと解釈できる。これを果たすことによって人の「天然持前の性は正しきゆえ、悪しき方へ」赴かない結果となる。これは天と人との相互作用と言えよう。また、人と人の水平的関係において考えれば、人は他人の自由を妨害しない限りみずから自主・自由の精神を貫いて行動すれば、一身の独立を得、かつ他人とよい関係も築くことができる。換言すれば、人と人との間の相互作用も確認できる。要するに、「天道」「天性」「万物の霊」という三つの言葉から天・人・他の人という三者関係も明白であり、その三者の関係において天と人との能動的な作用も明らかにされる。

つぎに、天対男女の関係は夫婦の道という文脈の中で読み取ることができる。たとえば、「天の人を生ずるや、開闢の始、一男一女なるべし。数千万年の久しきを経るもその割合は同じからざるを得ず。(省略) 又男といい女といい、等しく天地間の一人にて軽重の別あるべき理なし」(前掲書、9 頁) という一文がある。天と地が初めてできたときから一人の男に対し一人の女を創り、その割合は天の定めた規則として絶対に変わらないという意味である。ここにも天と男と女は、前述の三者関係と同じく密接に関連している。天と男女の垂直関係で考えれば、天の前で男も女もみんな平等だという天の定めがある。依って、男女それぞれの生存価値を持つため、互いに尊重し合うべきである。これを正しく生きるのは、天に対する男と女の務めであろう。これに対し、男と女の間での水平関係においても、どちらも分け隔てせず、天の定めた一夫一婦の義を守り、ともに子どもの教育に尽

力すれば、幸せな家庭も子どもの教育も成し遂げることができる。これは男女の間における積極的な相互影響だと言えよう。

また、他の箇所でも同じく天と親と子の三者関係も確認できる。「人の父母たる者、その子に対して我生たる子と唱え、手もて造り金もて買いし道具などの如く思うは大なる心得違なり。天より人に授かりたる賜なれば、これを大切に思わざるべからず。」(前掲書、10 頁) という一文があるように、子どもは両親から生まれるものだと一般に思われているが、実際は、その子の命の根源は天から受けたものだと考えられる。したがって、子どもを愛しみ、子の知徳の教育に務め、「自主独立」する一人前になるように育て上げるのは親の「天に対しての奉公」である。その反対に、子どもも親を愛し、親が健在のときのみでなく、病気のときも、また死後も孝行を尽す。それは天に対するのみでなく、親に対しての子の果たすべきことでもある。これは天と親子の能動的な相互作用である。

要するに、「中津留別之書」の構想では、人間のいかなる関係にも天が介在すると言えよう。天は様々な形を通して人間一人ひとりに働きかけ、他方では人間は天に応え、天の道に従う。天・人・他の人という三位の一体又は調和をめざす三者関係の均衡を保ちながら生きれば、正に「一身独立して一家独立し、一家独立して一国独立し、一国独立して天下も独立」になる。依っていけば重要なのは、人は福沢諭吉の唱える「人に交り」、「自主自由」、「自由独立」、「又男といい女といい、等しく天地間の人にて軽重の別あるべき理なし」などの高い価値観を正しく理解し、それらをめざして生きるように役立てることであろう。



「中津留別之書」を執筆した旧宅
現在は隣接して福沢記念館が建っている
写真提供：福沢記念館(大分県中津市留守居町586番地)



エジプトにおける日本研究と福沢諭吉

カイロ大学日本研究センター所長 Hassan Kamal HARB
(ハサン・カマル・ハルブ)

カイロ大学日本語日本文学科は間もなく50周年を迎える。同学科は、これまで日本語と日本文化を専門とする研究者を多く輩出し、エジプトのみならずアラブ諸国における日本研究をリードしてきた。同学科が設立されるまでは、日本に関する情報リソースは英語、又はフランス語からの訳文であったが、学科の卒業生によって日本語による教科書や文学作品など、数多くの出版物がアラビア語に訳されてきた。しかし、近代日本の史料や資料となると翻訳物はまだ数が少ない。このような状況の中、学生たちに近代日本の構築者の一人である福沢諭吉について紹介する際は、原文を用いてきた。今回、西沢直子氏から「中津留別之書」のアラビア語翻訳を依頼された際、エジプト人が近代日本の史料を母国語で読みきかけになると思い、喜んで引き受けさせていただいた。そして、翻訳を終え、留意した点や幾つかの気づきがあったので、ここに記したいと思う。また、エジプトの学生が抱く福沢へのイメージが、「中津留別之書」の読後に変化した点について述べていきたい。

「中津留別之書」のアラビア語翻訳にあたり最も苦悩した点は、福沢の文章に隠された背景や日本人なら当たり前持つ認識が、読者となるエジプト人及びアラブ人には理解が及ばない点である。それは、文化的・社会的な要素のみならず、日本人としての民族意識も含まれた。残念ながら、この本では解説や註を入れる事が叶わなかったため、日本文化・思想にそれほど詳しくない読者にとって、誤解や難しく感じる箇所があるのではと懸念が残る。このように、文章に隠された思想や日本人の共通認識に対し、限られた文字数の中、どこまで正確に翻訳できるか、異文化をどこまで母国の人々に正しく伝えられるか、多くの翻訳者も苦悩しているのではないだろうか。その後、福沢研究センターの助成を受け『学問のすゝめ』アラビア語翻訳を出版した。『学問のすゝめ』においては註を多くし、福沢の意図が誤解される事がないよう留意した。

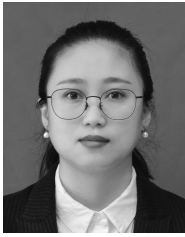
私はこれまで「近代日本史」と「近代日本思想」の授業を受け持ってきているが、それらの授業において、主人公は常に福沢諭吉である。学生にとっての福沢は「気になる人物」であり「もっと知りたい」という声をよく耳にするものの、好きか嫌いかわかると、残念ながら好きではないと答える学生が常に一定数いる。それらの学生が抱く不満の原因は、福沢の合理性と宗教観である。例えば、彼が物事を説明する際や例を挙げる際に数字を用

いる箇所、戸惑いを覚えるようである。特に、エジプト人にとって絶対に数字や計算を基準にしない場面において、福沢がそれをを用いている。具体的には『文明論之概略』で、「議論の本位を定る事軽重、長短、善悪、是非等の字は相對したる考より生じたるものなり」との記述に対して多くの意見が寄せられる。なかでも、物の軽重と長短をはかることと、良心と善意を基準に判断すべき善悪を同じフレーズに並べ、合理的に捉えていることに対しては、特に不満を抱いている。また、一神教徒であるエジプトの学生は、やはり福沢の宗教観が気になっている。『福翁自伝』にある稲荷神社のエピソードからは、福沢に対し宗教を全く信じていないというマイナスイメージを持つ。

上述が特に学生に不満を持たれる点だが、福沢の功績に対する評価は大変高い。私の授業に登場する他の近代日本の先駆者と比べ、福沢は説明が丁寧で、文体が分かりやすいという意見があり、読者、特に初心者に対する心遣いに長けているという評価もある。また、福沢が物事を説明する際にお金と数字を用いる事には、賛成派と反対派で議論になる。福沢は経営者であるためお金を例にしているだけだと単純に考える学生がいる一方、お金や数字は、合理的思考の重要なファクターの一つであるので、啓蒙家である福沢が近代日本社会を築くためそれに焦点を当てるのは当然であるとする学生もいる。

上記のように、福沢に対するエジプトの学生の評価は多種多様である。しかし、「中津留別之書」アラビア語翻訳を読んだことによって、評価が変わったと述べる学生たちがいた。それは、慶應義塾を設立した福沢が自らの富を築くことに尽力したのではなく、塾が提供する知識を通して日本人が豊かになることをはじめ、日本全体を富国にしたいと言う意図を持っていたと理解したとの意見であり、また、福沢の故郷である中津について、『福翁自伝』に書かれた故郷は評価が低いと感じていたが、「中津留別之書」では友人との交流や、故郷の未来を懸念するなど、深い愛情が見られたという評価であった。

今回、翻訳の機会をいただき、「中津留別之書」を学生たちに紹介する事ができた。結果、福沢に対する学生の評価が変わり、認識が見直される事となった。このような現状を目の当たりにし、近代日本を樹立した福沢の思想は、もっと広く、正確に伝えていかなければならないと改めて感じた。今後も福沢の貴重な著書をエジプト及びアラブ地域に伝えるべく、翻訳に着手していきたい。



福沢諭吉「中津留別之書」を読む

中国天津社会科学院副研究員 周 曉 霞

筆者は、大学三年生の時、一生に影響を与えることになる一冊の本に出会った。それは福沢諭吉の『学問のすゝめ』である。あの有名な「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云へり」という一文に興味を惹かれ、この書を読み始めたのだが、読み進めるうち、智慧を開き徳義を修めて「一身独立」することが「一家独立」を経て、「一国独立」へとつながっていくという、福沢の近代的国民形成の論理構成の見事さに惹きつけられた。そして同時代の中国が急速な近代化を押し進められなかった背景には、西洋の科学技術だけではなく、その基底にある文明の精神を学ぶことの意味を、福沢のような見事な論理で説くような思想の不在があったのではないかと考えるようになった。さらに、それまで社会における学問の意味について考えることがなかった私は、この書を読んだことを契機として、日本の近代についてより深く知りたいと考えるようになった。

自分自身が女性であることもあり、福沢の著作集を読みすすめるうち、彼の女性論に興味を持つようになった。そして、福沢は、女性に対する社会的圧制や伝統的な習慣、固定観念を批判する一方で、しかしそれでもなお、そうしたものを徹底的に捨てられていない部分があるのではないかと感じるようになった。そこで福沢の女性論を考察しはじめ、その時最初の女性論といわれる「中津留別之書」にも触れた。この3500字程度の短い文章で、自主自由、個人から国家の独立への展開、男女平等、親子関係、政府の役割や洋学の重要さなどの主張が盛り込まれる。その中で、福沢の「夫婦別あり」についての解釈をかなり面白く読み込んだ。なぜ儒教に精通していた彼があのように解釈したのか。男女ともに独立した心身をもって、近代日本の形成という道に邁進しなければならないと福沢は期待していた。その前に、彼は儒教道德との対決が不可避であると考えた。さらに、伝統的な夫婦倫理や親子倫理だけでなく、それまでの「旧習の惑溺」をも一掃しなければならないと思われた。「中津留別之書」では、「惑溺」という二文字は使われないが、その固定化されてしまった価値観から解放しようとする意欲を、今度の「中津留別之書」の中国語への翻訳を通じて、

十分に読むことができる。

近代日本の思想界・教育界の大立者ともいうべき大きな歴史的地位を占めている福沢諭吉は、生涯を通じて前近代的精神と戦い、日本を近代国家に築き上げるために奮闘していた。近代日本や中国、そして、アジアの思想史を研究する者にとって、福沢は避けて通れない重要な思想家である。『学問のすゝめ』と『文明論之概略』をはじめ、教育論、女性論や時事評論など彼の著述は、国境と世紀を超えて、中国でも広く紹介され、読まれている。近代中国やアジアにとって、福沢の思想は貴重な知的資源の一つだといっても過言ではない。

管見の限り、中国では、1935年、鮑維湘によって編纂された『福澤諭吉』(中華書局、1935年) ははじめての福沢伝記といえるだろう。そのなかで、「彼の生涯にわたって最も偉大な貢献は、日本の封建的な古い因習を破って、日本の新文明への建設に全力を尽くしたことであり」と高く評価された。それ以来、数多くの研究者が福沢に関心をもって研究に取り組んできた。また、それぞれの研究者が各々の問題意識に基づいて、多様な福沢像を構築している。しかし、福沢の思想に対する評価は今でも分かれ、啓蒙思想家や「独立自尊」精神の提唱者としてのイメージを評価する一方で、近代日本のアジア侵略思想やアジア蔑視観形成の立役物としての側面を批判する。とはいえ、福沢の思想的原点としての「中津留別之書」や後の思想展開への影響などを検討の対象とする研究は、あまり見られなかった。したがって、今後も中国において福沢についての研究をさらに深めるべきであろうと思われる。

とくに、世界中でナショナリズムの動きが高まる今日で、コロナウイルスの恐怖と隣り合わせに生きているいまだからこそ、福沢諭吉の思想的原点をあらためて吟味する必要があるのではないだろうか。時代の変化とともに、既成の価値意識も常に新陳代謝を繰り返すわけである。私たちに必要なのは支配的な価値観に「惑溺」することなく、多元的な価値の前に思考しつつ、選択し、挫折を繰り返しながらも絶え間なく前進することではないだろうか。



福沢の思想の普遍性と妥当性について

Researcher at CHAM-Centre for the Humanities (NOVA FCSH)
and at the Centre for History of the University of Lisbon;
Professor at AESE Business School

José Miguel Pinto dos Santos
(ジョゼ・ミゲル・ピント・ドス・サントス)

「中津留別之書」の翻訳は、私にとって福沢諭吉の手になる文章との初めての本格的な取り組みになった。長きにわたって私は、福沢を19世紀の教育改革者として認識していた。彼を日本の近代化における強力な担い手として理解し、明治期日本の社会的かつ政治的發展に極めて決定的な影響を与えた人物として見ていた。

私がこの翻訳の仕事を通じ、「中津留別之書」と深く関わっていく中で意識するようになったのは、福沢の思想の普遍性であった。すなわち、福沢の考えが日本においてのみ重要であるのではなく、また彼の説く戒めが19世紀に生きる人びとにのみ当てはまるといってもいい、ということである。私に最も衝撃を与えたのは、彼の理想や考えがあらゆる文化、あらゆる時代の人びとにとっても思慮深く、適切であると思え、どこのどの時代においても、善良な意志を持つ人びとに確実に受容されるであろうということであった。それが紀元前3世紀の中国の儒学者であれ、紀元前2世紀のローマ市民であれ、20世紀の米国の市民権運動家であれ、21世紀のいかなる国のプロフェッショナルであれ、である。

福沢の思想の普遍的な性格は、何が人間を人間たらしめるかに対する、福沢の自己認識に根差しているように見える。言い換えれば、人間が「万物の霊」として存在するということが、すなわち「徳を養う」能力、また物に接して知識を得るため、見聞を広めるため、他者との友情

を築くため、そして自らの経済的自立を果たすために自由でありたいという人間の願望に関する自己の確証である。「中津留別之書」における彼の考察で、現代の私たちにとって時代遅れであったり外的外れであったりするものはほとんどない。中でも彼が「自由」と「我まま」との間、「自由」と他者の権利に対する妨げとの間におく弁別は殊更にそうである。

「中津留別之書」と取り組む中で、私は別の箇所ですでに気付いていたもう一つの福沢の思想の特徴、すなわち彼の考えが日常生活においていかに重要であり、応用可能であることを示すことへの彼の努力を確認することができた。「中津留別之書」の場合では、福沢はいかに徳や自由が、儒学における4つの社会的関係性——友人関係（他の3つのタイプの関係性を通しては結びつかない人びとの間の関係）にはじまり、夫妻、父子と続き、新たな秩序における君臣関係に終わる——を高め完成させるかについて、いくつかの具体的な例を見せることによって示し得たのである。

以上のことから、私は自身の「中津留別之書」のポルトガル語への翻訳を、ひとつの最も興味深く実り豊かなプロジェクトへの貢献として捉えるようになった。福沢研究センターを代表して親切な招待をしてくださった西沢直子教授に謝意を表したい。



イタリア語で読み解く「中津留別之書」

サピエンツァ・ローマ大学
イタリア東洋研究学科日本近現代史准教授
Marco Del Bene
(マルコ デル・ベネ)

史学者として、福沢諭吉の存在、とくに明治という時代の中で成熟した彼の思想および歴史的役割は知っていたが、翻訳の依頼を受けるまで「中津留別之書」を知らなかったのが、彼の書き記したこの書を読み、翻訳することは大変興味深いものであった。とくに彼が若い時代、完全に故郷を離れる際に記した書物だと改めて認識して読むと、彼のその後の思想の片鱗ともいえる箇所が既に垣間見られることも、大きな魅力のひとつであった。

彼は「学問」について、長期間にわたり鎖国をしてい

た日本にとって、海外の学問を知ることは、国家の経済力・軍事力・すべての発展において非常に重要であり、知識を蓄積することこそが、他国から侵略されず諸外国から対等に扱われる唯一の方法であると明確に述べている。そして、海外さらに言えば西洋からくる知識は国家のためだけでなく、一個人の形成のためであり、また国家は一個人の集合体である以上、最終的には国家のためになると考えている。

そして「平等」については、男女間においても、伝統

を尊重しつつも近現代の考え方に非常に近い主張を展開しており、また親子間においても、子どもとはいえ人格を兼ね備えた一個人であることを尊重し、自分の子だからというだけで所有物のように扱うのではなく、経済的にも自立させ、自由独立の精神を持つ一人の人間に育てるのが親の務めであると明言するなど、彼の洞察力そして世界観は、今を生きる私たちにも十分に伝わり、かつあてはまる思想であることが、彼の文章から深く伝わってくる。

福沢諭吉の記した言葉は、当時の伝統に基づいた非常に古い言葉を活用しているものの、そのコンセプトは斬

新で現代的とも言える。

翻訳という観点において、その複雑な感触を保ちつつ、特に現代イタリア語で内容を理解しやすく、かつ当時の言語の持つ奥深さやその進化を表現することは、困難を極めた。そのため、現代イタリア語で読みやすくしていても、福沢諭吉が表現しなかったニュアンスを理解させるために、古語ともいえるべき言葉も使用している。

この翻訳が、福沢諭吉の生きた時代、日本が諸外国との関係性の中で大きな変化を余儀なくされた時代、という歴史的背景への理解を深めつつ、福沢諭吉を研究する若い学者の一助となることを心より願っている。

「中津留別之書」の多言語訳の刊行に当たって

元フランス国立東洋言語文化大学 (INALCO) 日本学部専任教師
福沢研究センター客員所員

Marion Saucier
(マリオン・ソシエ)

福沢諭吉の「中津留別之書」を多言語に翻訳して本にすることを企画された西沢直子氏にまずお礼を申し上げたいと思う。彼女は、一貫して、福沢諭吉の著作を研究者や一般読者にもっとも読みやすいかたちで提供して来た。彼女が編集に参加した書簡集、著作集、福沢諭吉辞典等は、外国で福沢諭吉を研究しながらフランス語への翻訳を試みている私にとって、心強い味方であった。慶應義塾福沢研究センターの皆さんへも謝意を表したい。

「中津留別之書」を多言語 (12の言語) に翻訳する企画は、ほかにはあまり例のない大胆な試みだったと思う。また、この作品を選んだということも慧眼であろう。アルベルト・ミヤマルティン氏が書いているように、「中津留別之書」は福沢諭吉が生涯主張し続けた課題を含む文書であるからだ。社会を構成する人間関係が描写され、自由、権利、独立など複数の概念が定義されている。当時の日本人には分かりにくい概念であるが、福沢がそのあと1870年代を通じて紹介し続ける用語である。また、私が「中津留別之書」において最初に注目したのは男女関係の説明であった。1899年 (明治32)、つまりこの世を去る1901年のわずか2年前に『女大学評論・新女大学』を刊行していることから明らかのように、女性論は福沢が最後まで書き続けたテーマである。「中津留別之書」の中で、福沢は妾制度を取り上げて、妾の存在が家庭、特に子どもに与える害をあきらかにしている。そして「男子に二女を娶るの権あれば、婦人にも二

夫を私^{おぼし}するの理なかるべからず。試みに問う、天下の男子、その細君が別に一夫を愛し、一婦二夫、家に居ることあらば、主人よくこれを甘じてその婦人に事^{つか}るか」と書いている。初めて読んだときに、この問いから非常に強い印象を受けた。そしていまだに、当時の日本婦人の立場をこれ以上うまく説明する文章はないと思っている。社会学上の概念ではなく、日常的な人間心理に基づきながら、当時の男女関係の異常さを示している。また、明治3年2月15日に (つまり「中津留別之書」より数か月前のこと)、福沢は、友人の九鬼隆義に書いた手紙の中で、「女大学」の内容を取り上げて、その書は女性だけを罪人にして、婦人は気の毒だ、と自分の感想を述べている。「中津留別之書」と九鬼隆義に与えた手紙の中身を合わせると、福沢の女性の立場に対する心の叫びが聞こえる。明治時代に入ってまだ間もないころに、このように鋭い分析ができたことは驚くべきである。多言語訳を通して、多くの読者がこれを読めるとはありがたいことである。

「中津留別之書」という題のフランス語訳には少し迷った。最初はただ «L'Adieu à Nakatsu» («Farewell to Nakatsu») にしていたが、繰り返し読んでいるうちに、福沢は直接人に話しかけているのだという印象が強くなり、«À mes amis de Nakatsu» («中津のともへ」と改めた。それが正しい選択だったかどうかは、読者の判断にまかせたい。

新収資料紹介

■ 神津家資料

【寄贈】

2021年5月に神津秀章様より、神津家に所蔵されていた福沢諭吉および慶應義塾関係資料をご寄贈いただいた。

神津家は長野県北佐久郡志賀村（現佐久市）の豪農で、代々九郎兵衛を名乗る家柄の十九代目にあたる吉助は、その末弟国助と甥の茂木吉治が慶應義塾に学んだことから福沢諭吉との交流が始まり、単なる塾生の保護者としての関係をを超えて親交を深めるようになった。吉助の長男邦太郎は明治14（1881）年12月に慶應義塾に入塾し、のちに日本最初の洋式牧場である神津牧場を開いた。福沢はこの牧場のバターを愛し、手紙で「日本第一流にして、舶来品を圧倒するものなり」と絶賛している。今回はその書簡を含む福沢諭吉の手紙12通（扁額2面、卷子2巻）、献辞のある福沢諭吉肖像写真、同『福翁百話』など25点余の貴重な資料をいただいた。慶應義塾関係書簡の束などの詳細な調査が済み次第、詳しくご報告したい。

■ 福沢英之助宛福沢諭吉書簡

明治5（1872）年5月11日付・7月7日付 【購入】

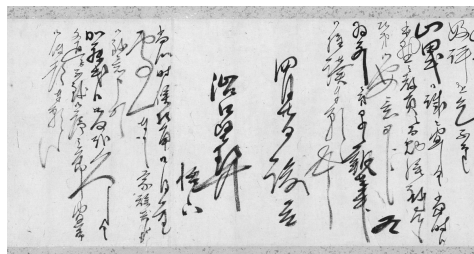
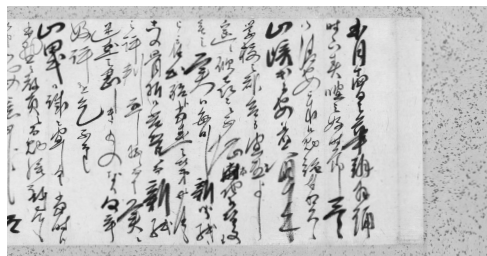
福沢英之助は旧名和田慎二郎（慎次郎）。文久3（1863）年初夏に慶應義塾に入塾し、慶応2（1866）年に幕府が幕臣の子弟を選抜してイギリスに留学させた際に、当時中津藩士でありながら幕臣でもあった福沢の弟として、福沢英之助の名で参加した。英之助宛の福沢書簡は48通が知られているが、そのうち原本と照合できている書簡は14通にすぎない。この2通も『福沢諭吉書簡集』第1巻（岩波書店、2001年）刊行時には、校訂ができなかった。校訂後の本文は『近代日本研究』第23巻 pp.262～5 参照。

■ 渋江保宛福沢諭吉書簡 明治15年4月20日付 【購入】

渋江保は、安政4（1857）年森鴎外の小説で有名な津

軽藩医渋江抽斎の子として江戸にうまれた。大学南校で学び『米国史』『小学授業必携』『歴史研究法』などの著訳書があり、またジャーナリストとしても活躍し、『東海暁鐘新聞』の主筆も務めた。明治14年9月から16年2月まで、愛知県宝飯郡国府町（現豊川市国府町）の宝飯中学校で校長を務めている。この書簡も左記英之助宛と同様、『福沢諭吉書簡集』第3巻刊行時には校訂ができず、校訂後の本文は『近代日本研究』第23巻 p.273 を参照されたい。

今回購入した卷子には、9月28日付の同人宛小幡篤次郎差出書簡も貼り込まれていた。交詢社の生涯社員の話や朝鮮の壬午軍乱、自由党の後藤象二郎・板垣退助の洋行などに触れている。本文は『近代日本研究』第38巻掲載予定。



『小幡篤次郎著作集』刊行事業の進捗状況

1. 文献調査

昨年の事業開始とともに、小幡著作の原本を所蔵する図書館をリストアップし、著作ごとの所蔵館と所蔵数をデータ入力した。それに基づいて、以下の図書館を訪問・調査した。

*私立図書館：東書文庫 *公共図書館：中津市立小幡記念図書館、府中市立図書館 *大学図書館：東京大学、筑波大学 *国立国会図書館：関西館、東京本館

中津市立小幡記念図書館については、中津市歴史博物館の学芸員の皆様にご協力いただいた。東京大学と筑波大学については所属大学院生の方の協力を得た。感謝申し上げます。以上と慶應義塾所蔵本をあわせて、17の著作、延べ344冊について調査票を作成した（2021年9月末現在）。今年度には、第1巻で収録予定の作品を多く所蔵する九州大学、京都大学、宮津市立図書館への調

査を予定し、各図書館への手続きも終えていた。だが、COVID-19による緊急事態宣言により、訪問中止を余儀なくされた。昨年来、緊急事態宣言とそれに準じた措置のために、利用できる図書館が限定された。（住田孝太郎）

2. 刊行予定

『小幡篤次郎著作集』は全5巻を計画しており、第1巻は『英文熟語集』（慶応4年）、『天変地異』（明治元年）、『博物新編補遺』全3巻（明治2年）、『生産道案内』全2巻（明治3年）を収録し、2022年3月の刊行を予定している。小幡篤次郎はこれまで、伝記もわずか5丁の『小幡篤次郎先生小伝 並小幡記念図書館沿革概要』（1926年）しかなく、初めての著作集であるため、現代の我々にとっての読みやすさを優先しつつも、なるべく原本の形態に近いテキスト作成を心がけている。4著作のうち、『英文熟語集』は影印版で収める。（西沢直子）

主な動き

■ 福沢諭吉記念慶應義塾史展示館の開館

塾史展示館は4月14日～16日のKeMCoのグランドオープンに合わせて、完成前のプレオープンを行い、5月15日には長谷山彰前塾長のもと、完成式を行なった。ただ、コロナ禍の緊急事態宣言下ということもあり公開は延期、7月1日、2日の内覧会を経て、7月5日に伊藤公平塾長のもと開館式を行い、オープンした。

同日から10月9日まで同時開催で企画展「慶応四年五月十五日一福沢諭吉、ウェーランド経済書講述の日」も開催した。

また、開館記念図録作成のほか、義塾公式グッズとして、ポストカード、一筆箋、ミニグラス、マグカップ、エコバッグなどの製作にも携わった。

組織としては4月1日付で開設され、館長に平野隆所長、副館長に都倉武之君、専門員に横山寛君が就任した。5月6日に第1回運営委員会、6月10日に第1回所員会議が開催された。

■ 大阪シティキャンパスの福沢研究センター講座

2019年度開催予定で、コロナ禍で延期となっていた「関西の福沢山脈」の2講座について、3月20日は小室正紀君による「摂州三田藩の人々と福沢諭吉」、7月18日は都倉君による「小泉信吉・信三父子と「気品」と『帝室論』」と題した講演が、いずれもリモートで行われた。都倉君は終了後、開館間もない塾史展示館からギャラリートークも実施した。

2021年度は「福沢諭吉再考」と題して、11月27日から2022年3月19日まで、全5回で行なわれる予定である。

■ 一貫教育校との連携

コロナ禍で一貫教育校の旅行等が中止となり、塾史展示館の開館と相まって、三田キャンパスや塾史展示館の見学会が行われ、これに協力した。3月2日横浜初等部6年生、4月10日中等部1年生、6月19日幼稚舎教員有志を案内した。

■ 小幡篤次郎著作集刊行事業

3月10日に刊行委員会を開催し、刊行スケジュール等具体的な事業計画を確認し、5月10日に編集委員会において巻割りを決定、来年3月第1巻刊行に向けて事業を進めている。

■ 中津市との協定

慶應義塾と中津市の間で文化・教育・学術等の分野で相互に協力するための連携協定が4月22日に奥塚中津市長と長谷山前塾長の出席で締結され、平野所長、西沢直子副所長が同席・懇談した。

この協定に基づき、今年度は11月20日にアルベルト・ミヤンマルティン所員、ヘレン・ポールハチュット客員所員、マリオン・ソシエ客員所員、グェン・ティ・ハイオン・トゥック客員所員、西沢副所長が参加して、本号で紹介した「中津留別之書」に関するZOOMによる市民講座「中津と福沢諭吉」を開催する。

また例年協力する中津市主催アーカイブズ講座には、上野大輔所員、西沢副所長によるオンライン講義を提供する。

訃報

コロナ禍のなか、淋しい知らせが相次いだ。

福沢研究センター設立以来所員、のち客員所員、顧問を務められた佐志伝先生（元慶應義塾高校教員）が2020（令和2）年8月5日に逝去された。先生は長い間、福沢諭吉および慶應義塾史の研究に携われ、義塾の年史だけでなく、両研究の基本的文献を収録した大部な『マイクロフィルム版福沢関係文書』の編纂を成し遂げられた。

2か月後の10月6日には、倫理学がご専門で『福沢諭吉の宗教観』のご著書があり、やはり設立以来の所員で、1987（昭和62）年度には福沢研究センター所長を務められた小泉仰先生（慶應義塾大学名誉教授）の訃報に接した。

両先生の堅実で優れた研究は、今日の福沢研究センターの活動の支えのひとつになっている。また今年7月21日には、2017（平成29）年から一般社団法人福沢諭吉協会と福沢研究センターの有志で開始した、福沢の門下生である竹越与三郎への来翰を読むプロジェクトで指導をしてくださっていた、客員所員の西田毅先生（同志社大学名誉教授）の訃報にも接することになった。深い悲しみのなかで、唯々先生方のご冥福をお祈り申し上げたい。

福沢研究センター諸記録 (2021年1月～2021年9月)

■ 諸会議

- *2020年度小幡著作集第3回編集委員会(1月18日)
- *2020年度執行委員会(1月20日、3月17日)
- *2020年度運営委員会(3月4日)
- *2020年度小幡著作集第2回刊行委員会(3月10日)
- *『近代日本研究』第38巻編集委員会(3月30日、8月25日、9月28日)
- *2021年度執行委員会(4月5日、5月6日、6月3日、7月8日、8月17日、9月9日)
- *2021年度小幡著作集第1回編集委員会(5月10日)
- *2021年度第1回福沢研究センター会議(6月10日)
- *2021年度運営委員会(4月12日、7月20日)

■ 人事

- | | | |
|-----------|------------------|--------|
| <所 長> | 退任 井奥成彦(文学部) | ～3月31日 |
| | 新任 平野隆(商学部) | 4月1日～ |
| <副 所 長> | 退任 平野隆(商学部) | ～3月31日 |
| <運営委員兼所員> | | |
| | 退任 加藤三明(幼稚舎) | ～3月31日 |
| | 退任 澤田達男(理工学部) | ～3月31日 |
| | 退任 林温(文学部) | ～3月31日 |
| | 退任 米山光儀(教職) | ～3月31日 |
| <運営委員> | 新任 朝倉浩一(理工学部) | 4月1日～ |
| | 退任 岩谷十郎(法学部) | ～7月31日 |
| <所 員> | 新任 中西聡(経済学部) | 4月1日～ |
| <顧 問> | 退任 小泉仰 | ～3月31日 |
| | 新任 米山光儀 | 4月1日～ |
| <客員所員> | 退任 田中康雄 | ～3月31日 |
| | 新任 加藤三明 | 4月1日～ |
| <研究嘱託> | 新任 加藤学陽 | 4月1日～ |
| | 新任 小林伸成 | 4月1日～ |
| | 新任 金沢裕之 | 5月1日～ |
| <事 務 局> | 退職 宮脇麻里(非常勤事務嘱託) | ～2月28日 |
| | 退任 横山寛(事務嘱託) | ～3月31日 |
| | 新任 岡部敏和(非常勤事務嘱託) | 4月1日～ |
| | 新任 西村真由(事務嘱託) | 5月1日～ |

■ 主な来往

- *中津市教育委員会松岡李奈氏、三谷紘平氏来訪(1月20日、2月8日、4月12～13日、7月13～16日、9月21日)
- *ヒサクニヒコ氏、展示館パンフレット制作のため来訪(1月21日)
- *神代忠男氏・都倉、塾長面会(1月22日)
- *三四会医学部新聞寄贈(2月10日)
- *横浜初等部6年生見学会(3月2日)
- *中等部キャンパス見学対応(4月10日)
- *藤山一郎音楽事務所資料借用(5月10日)
- *神代忠男氏授業のため来訪(5月19日)
- *阿部慎蔵氏、三田評論カット制作のため展示館来訪(6月10日)
- *幼稚舎教員展示館見学対応(6月19日)
- *羽二重団子資料借用(6月24日)
- *三科仁伸氏、伊東家資料整理のため来訪(8月24日)
- *二之湯智氏、資料閲覧(9月2日)
- *南方熊楠顕彰館資料貸出(9月24日)
- *国立歴史民俗博物館資料貸出「学びの歴史像—わたりあう近代—」(9月30日)

■ 取材対応

- *2月10日掲載、朝日新聞「はじまりを歩く」
- *3月1日発行、大分合同新聞「研究者が語る福沢の魅力」
- *5月8日放送、テレビ朝日「サンドウィッチマン&芦田愛菜の博士ちゃん」(3月30日取材対応)
- *6月8日掲載、朝日新聞名古屋版夕刊(5月26日対応、展示館デジタルコンテンツ関係)

- *エクスタレージ『山手線建築散歩』(6月14日対応)
- *8月15日放送、TBS特別報道番組「へいわとせんそう」(7月16日対応、塚本太郎資料)
- *8月11日掲載、読売新聞朝刊(7月29日対応、鈴木間多資料)
- *TBS「報道特集」(8月20日対応、島澄夫関係)
- *NHK「映像の世紀」(9月10日対応、上原良司関係)
- *10月26日放送、テレビ朝日「じゅん散歩」(9月7、14、22日対応、三田キャンパス・展示館関係)
- *9月29日掲載、読売新聞都内版朝刊(9月16日対応、展示館関係)

■ 出張・見学

- *都倉、白石、模型の打ち合わせのため早稲田訪問(1月18日、3月26日、4月30日)
- *西沢、中津出張(3月15～16日)
- *井奥前所長、西沢、新中津市学校運営委員会出席(3月15日)
- *都倉、京都出張、霊山観音(4月16～17日)

■ 講師派遣

- *アルベルト・ミヤンマルティン所員、福沢諭吉先生121回忌法要時記念講演(2月3日)
- *井奥前所長、新中津市学校市民講座にて講演：『著作に見る福沢思想』「時事小言」(3月13日)
- *平野所長、都倉、三田評論5月号座談会：「ストーリーで見せる開かれた展示施設へ」(3月26日)
- *西沢、カイロ・ミスル大学リモート講義：「近代における日本語の変化と福沢諭吉」(3月27日)
- *西沢、都倉、病院オリエンテーションにて講義：「慶應義塾と福沢諭吉・北里柴三郎」(4月1日)
- *都倉、SDM 新入生講演：『学問のすゝめ』の読み方(4月9日)
- *西沢、中等部にて講演：「一身独立と自由」(4月10日)
- *西沢、三田オープンカレッジ：「福沢諭吉の生涯をたどる—120年のときをこえて」(5月15、22、29日、6月5日)
- *都倉、「天皇の退位等に関する皇室典範特例法案に対する附帯決議」に関する有識者会議(5月31日)
- *西沢、墨田区女性センターすずかけ大学にて講演：「福沢諭吉の歴史からひも解く男女共同参画」(6月12日)
- *都倉、SFC 中等部にて授業：「慶應義塾のシンボルと「塾風」を考える」(6月17日)
- *都倉、上原良司を偲ぶ会にて講演：「上原良司の意思と意志」(6月20日)
- *都倉、船橋三田会講演：「福沢諭吉、私立の苦悩と発展」(6月27日)
- *都倉、慶應大阪シティキャンパス福沢研究センター講座にて講演：「小泉信吉・信三父子と「気品」と『帝室論』」(7月18日)
- *都倉、福沢諭吉記念慶應義塾史展示館でオンラインギャラリートーク(7月18日)
- *西沢、国分寺三田会講演：「中津藩士たちの明治維新」(9月20日)

■ その他

- *西沢、地域連携室運営委員会(1月15日、7月15日)
- *都倉、塾史展示館業者との打合せ(1月18日、3月31日、4月6、20、27、28日、5月11、28日、6月21、29日、8月11日、9月7日)
- *西沢、グローバル教育会議(1月20日、4月19日)
- *西沢、国際センター運営委員会(3月10日、7月13日)
- *都倉、港区文化財保護審議会(3月16日、5月18日、9月6日)
- *都倉、評議員会で展示館につき報告(3月19日)
- *西沢、旧邸保存会評議員会(3月25日)
- *中津市との協定書立ち合い(4月22日)
- *西沢、三田史学会委員会(6月16日)
- *都倉、三田メディア協議会(6月23日)
- *都倉、美術品管理運用委員会(7月6日)

慶應義塾福沢研究センター通信 第35号

Newsletter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2021年10月31日 (年2回刊)

編 集 慶應義塾福沢研究センター
発 行

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

電 話 03-5427-1604

<http://www.fmc.keio.ac.jp/>

印 刷 (有)梅沢印刷所